

内山完造研究会報告③

上海の内山書店と医学書、医療機器の販売について (1)

孫 安 石 (神奈川大学)

はじめに

1. 内山書店と中国人の医学留学生 — 浙江省立医薬専門学校と医学書, 病理学教材
2. 内山書店と同仁会の漢訳医書
3. 内山書店と医書組合との関係について (以下, 次号に続く)
4. 内山書店の医療器械販売と 1936 年の日本医療器械業者の中華民国視察団結びに

はじめに

神奈川大学の学内共同研究助成を受けて 2018 年度から 2020 年度の 3 年間に亘って実施されている「内山完造と日中関係史の研究」(以下, 内山完造研究会)は, 内山完造に関連する従来の先行研究を踏まえた各種シンポジウムの開催と展示会の開催, 内山完造の自伝『花甲録』の読み合わせ会, 内山完造の未公開日記に当たる「雑記」の解説という 3 つの方面から研究を進めており, その研究成果の一部は内山完造研究会のホームページ (<http://uchiyanakananzo.jugem.jp/>) 及び『人文学研究所報』第 61 号 (2019 年 3 月), 第 64 号 (2020 年 9 月) の紙面を借りて報告している。

本論考は, その内の『花甲録』の読み合わせ会を通して浮かび上がった複数の問題の内, 上海の内山書店が多くの医学書を販売して「大成功」を取め, 1930 年代以降はさらに医療機器を販売して, 「新発展」を成し遂げたという記述の裏付けを試みることにしたい。

本論考との関係で最も注目すべき先行研究は, 上海内山書店の経営について論じた高綱博文「上海内山書店小史」である⁽¹⁾。高綱氏の検討によれば, 上海内山書店の経営は,

(1) 1917 年に北四川路の魏盛里にて誕生し, 最初はキリスト教関係の本のみを扱う程度であったが, その他の書店が取り扱っていないキリスト教関係の書籍を取り入れたことで本の売上げや注文は順調に伸びていった,

(2) その後, 上海内山書店は, 顧客 (横浜正金銀行や三菱銀行など) の求めに応じて, 岩波書店の哲学叢書を含む一般書籍を取り扱うことになり, 1927, 28 年の「円本ブーム」を迎え, 日本人以外に商務印書館, 中華書局などの出版社や政府機関, そして, 中山大学など中国人顧客をも獲得することができ, 書店の経営は安定し,

(3) 1931 年の「満洲事変」を契機として, その販売書籍の傾向は, 以前の文学書, 社会科学書が主流であったものから自然科学書, 医学書, 農学書, 工学書などの割合を増やし, 国際都市上海に激変をもたらした戦争の時代にも順調かつ急速に発展していった, という。

ところで、上海内山書店の経営について論じた高綱氏のこれらの検討は、実は、内山完造の自伝『花甲録』、『そんへえ・おおへえ』や内山書店関係者の回想録と聞き取りなどに依拠していることを見逃すわけにはいかない。

勿論、内山書店の経営について論じた、高綱氏の指摘自体に疑念があるわけではないが、筆者としてはこれら自伝と聞き取り資料の他に上海の内山書店の経営を裏付ける史・資料はないのかどうかという点に注目したいのである。果たして、これまで指摘されなかった史・資料から内山書店と医学書、そして、医療機器の販売について裏付けることはできないのだろうか。

そこで、本稿は、まず『花甲録』に触れている医学書と医療機器についての記述を手がかりに同時代に中国向けの医学書と雑誌などを発行した「同仁会」関連の資料、さらには外務省外交史料館の関連資料などを検討することで、上海内山書店の経営実態とそこで医学書、医療機器を販売したことの関係についてのこれまで触れられてこなかった事実を明らかにしたいと思う。

以下、まず、『花甲録』の1921年の項にある医学校や医学書に関連する部分の記述、そして、1936年の日本の医療器械の販売に関連する記述を引用しておく（下線の部分は、とくに本論者が検討する部分を示している）。

「浙江省立医薬専門学校からの招待会で、この学校の教授の大部分が日本で勉強した人であることを知ったのみならず、大変良い話しを聞いたのは日本医学書の供給者がないと云うことであった。そこで、私はこの難事を必ず打開しようと決心した。その後私は実際犠牲を払ってこれが打開につとめた。そして、金原商店、南山堂、南江堂、吐鳳堂、半田屋、鳳凰堂等に直接取引きをして大いに日本医術の紹介に働くことが出来たばかりでなく、さらに同仁会の漢訳医書の販売に尽力して大成功をおさめたことも私の痛快事の一つである。私はこの医書の供給について商売にはまず捨石を打つことが第一歩であることをはっきりと知った。私はいつも捨て石を打つことを忘れないようになった。今日私が反対者の沢山あるにも拘らず、中日貿易促進会や日本中国友好協会の為に自腹を切って飛び歩いているのも、つまりは一つの捨石であるのだ。」（内山完造『花甲録』、岩波書店、1960年、121頁）

「この年であったと思う、東京の同仁会（中国に対する文化事業の団体でとくに医学と医術の方面で貢献せんとして居ったものである）主催で東京の有名医療器械店が七軒、北京の方面から各大都市で見本市を開催しつつ上海に来られた。そして、上海でも見本市を開催され、その時私は兼ねて抱えている日本医療器械の販売欠陥についてお話しした。（中略）そこで一つ私の方が皆さんの代理店となって、必ず完全な器械を目の前で組立てて渡すと云うことをすれば必ず喜ばれるに違いないと思う。ちょうど東店を開らくからご希望なら代理いたしましょうと話したところ、渡りに船とばかりに喜んでこの話は直ちに成立した。その後各店から見本品がポツポツ送って来られるようになった。即ち書籍専門にやって居った私の店で医療をお取ぎしようと云うことは、実は沢山の医書を扱うて居るためにお客様にお医者様が大変沢山あるのでこれ等のお医者さまへのサービスと云うつもりであったのである。とくに東店の二階全部を医器の陳列場に造った。内山書店の新発展とも云うべきであったのだ。」（『花甲録』、209頁）

この2つの記述に見える、内山にとって人生哲学でもあった「捨石」を打つことの重要性を認識させ、商売（販売）的にも「大成功」であり、「痛快事」であったとまで言わしめた医書の供給の成功体験はいかなる内容のものであったのだろうか。そして、新しい店の二階全部を医療機器の陳列場にし、内山書店の新発展の切っ掛けになった医療機器の輸入販売とはいかなるものであったのだろうか。

本稿は、以上の『花甲録』の記載を念頭に入れながら、

(1) 内山書店と中国人の日本医学留学生との関連を、浙江省立医薬専門学校という手がかりを通して見ていきたい。内山が大部分の教授が日本で勉強した人であると言っている浙江省立医薬専門学校は、外務省外交史料館の中国人留学生に関連する資料のなかでどのように登場するのか、についても検討を加えてみることにしたい。

(2) 内山完造が大成功をおさめたという同仁会の漢訳医書とはどのような医学書籍であったのか、そして、同仁会という組織が行った中国への医学書、医学雑誌の発行はどのようなものであったのか、本稿では、同仁会が中国語によって発行した『同仁会医学雑誌』と中国人留学生を支援する業務を担当した日華学会が発行した『日華学報』などに掲載された広告などを手がかりにその概略について述べることにしたい。

(3) 内山書店と医書組合との関係である。『花甲録』にみえる金原商店、南山堂、南江堂、吐鳳堂、半田屋、鳳凰堂との直接取り引きをしたというこれらの書店は、実は明治の中頃に組織された医学専門の書店によって組織された医書組合に所属した書店であった。この医書組合とはどのような組織であったのか、について若干、紹介したい。

(4) そして、最後には 1936 年に同仁会が主催し、北京、上海など中国の各都市において開催された医療機器の見本市が、実は内山が回顧している医療機械店の記述と一致していることについて紹介し、その具体的な日程と各地における活動について新たな資料を提示したい。

1. 内山書店と中国人の医学留学生 — 浙江省立医薬専門学校と医学書、病理学教材

内山は、『花甲録』の医学書に関する記載の中で、「浙江省立医薬専門学校からの招待会で、この学校の教授の大部分が日本で勉強した人であることを知ったのみならず、大変良い話を聞いたのは日本医学書の供給者がないと云うことであった。そこで、私はこの難事を必ず打開しようと決心した。その後私は実際犠牲を払ってこれが打開につとめた。」と記述しているが、ここで名前が見える「浙江省立医薬専門学校」とはどのような医薬専門学校であったのだろうか。

この浙江省立医薬専門学校に関連する最初の手がかりは、見城悌治氏が中国人留学生と千葉大学医学専門学校について記述した著書『留学生は近代日本で何を学んだのか—医薬・園芸・デザイン・師範』の中で確認することができる⁽²⁾。

それによれば、千葉大学医学専門学校と千葉医科大学で学んだ中国人留学生は合計 221 名で、中でも最も多かったのは浙江省出身で全体の四分の一を占め、江蘇省とあわせると凡そ半分を占めており、中でも浙江省立医薬専門学校は、千葉医学専門学校との深い繋がりがあった、という。

さらに、見城氏は、外交省外交史料館蔵の 1935 年 3 月の「浙江省立医薬専門学校教職員ニ関シ報告」に依拠し、浙江省立医薬専門学校の成り立ちについて、次のように紹介している。浙江省立医薬専門学校は 1912 年 6 月に設立され、初代の校長は日本留学組で金沢医学専門学校出身の湯爾和が担当したが、なかでも千葉医学専門学校を卒業した教官が多く、歴代校長の 4 名が千葉医学専門学校の出身であったとし、さらに、1935 年の日本の外務省外交史料館の記録によれば、当時の浙江省立医薬専門学校の「医科」にいた 24 名の教授のうち、10 名が千葉医専、4 名が東京帝大、東北、九州などで学んだ日本留学組であった、ことを紹介している⁽³⁾。

「浙江省立医薬専科学校に於ては最近独乙留学出身の校長辞任し其の後釜として我千葉医大出身王佶就任したるか之れと共に教授連に異動あり結局別紙名簿の通り本邦留学生出身者圧倒の大多数を占むるに至れり。既報の通り今回同校が久振りに学生の渡日見学旅行を行ふに至りたるは円為替

安、対日好転等にも原由するも前述の如く本邦出身教職員勢力の挽回せることも見逃すへからざる現象なり」

日本の外務省当局が記録したこの記述をみても、日本留学生出身者が圧倒的に多数を占める浙江省立医薬専門学校を何らかの形で支援する必要があるという日本側の配慮があっただろうことは容易に推測できよう。

【図1】 浙江省医薬専門学校教授名（一部）

付属科ノ部		浙江省立醫學專門學校教授名	
科	目	授者	別教授
外科	王伯	王伯	王伯
外総	朱叔青	朱叔青	朱叔青
重義	章昇平	章昇平	章昇平
國文	王陰	王陰	王陰
軍訓	施受德	施受德	施受德
德文	李守爲	李守爲	李守爲
化學	孫湘洲	孫湘洲	孫湘洲
物理	企職	企職	企職
加部	孫仲青	孫仲青	孫仲青
生理	孫仲青	孫仲青	孫仲青
組織	孫仲青	孫仲青	孫仲青
細菌	孫仲青	孫仲青	孫仲青
寄生	孫仲青	孫仲青	孫仲青
病理解	孫仲青	孫仲青	孫仲青
眼科	孫仲青	孫仲青	孫仲青
日支	孫仲青	孫仲青	孫仲青
藥物	孫仲青	孫仲青	孫仲青
胎生	孫仲青	孫仲青	孫仲青
局解	孫仲青	孫仲青	孫仲青
診斷	孫仲青	孫仲青	孫仲青
内科	孫仲青	孫仲青	孫仲青

(出典：外交省外交史料館蔵「浙江省立医薬専門学校教職員に関し報告」, アジア歴史資料センター, Ref. B05016169000, H-0915)

【図1】は同外務省記録に添付されている「浙江省医薬専門学校教授名」の名簿を示したものであるが、医科の部の合計24名の内、外総、解剖組織、生化学理、眼科日支、藥物、胎生局解、診断、外科・整形外科、耳鼻咽喉、公共衛生を担当する10名が千葉医学専門学校を卒業し、細菌、内科、皮膚花柳、眼科担当の4名が東京帝国大学に入って勉強し、東北帝国大学、九州帝国大学で勉強した人がそれぞれ1名ずつが含まれていることをみると、1930年代の半ばまで、日本の医科大学、とくに千葉医学専門学校を卒業した留学生が圧倒的な多数を占めていた事がわかる。

ところが、外務省外交史料館の記録には、上記の1935年の資料より早い時期の1929年に浙江省医薬専門学校の教員の黄振亜、孫遵行の2名が、学生20数名を引率し、日本の医学関連施設を視察するにあたり日本の対支文化事業の補助を申請する旨の資料が現存している。同資料によれば、ここで名前がみえる黄震亜は、同校の教務主任兼病理及び解剖組織学主任教授を担当する人物で日本の東北帝国大学の医科を卒業し、孫遵行は同校の眼科を担当する教員で千葉医科大学を卒業したことが分かる。

【図2】 浙江省立医薬専門学校の視察団参観に関する記録（一部）



(出典：外務省外交資料館蔵, アジア歴史資料センター, Ref. B05015743700, 満支人本邦視察旅行関係雑件／補助実施関係 第四卷, H-6-1-0-4_2_004)

【表1】 浙江省立医薬専門学校視察団の参観日程（1929年）

月	日	午前	午後
4月	25日		自由見学
	26日	三越, 日比谷公園	上野 (動物園, 博物館), 浅草
	27日	帝大医学部各教室	同病院
	28日	村山貯水池	自由見学
	29日		自由見学
	30日	内務省衛生試験所	理化学研究所, 栄養研究所
5月	1日	慶大医学部及病院	赤十字病院, 北里研究所
	2日	伝染病研究所	陸軍衛生材料廠
	3日	精神病院	三共製薬工場
	4日	東京市衛生試験所	東京市療養所
	5日		自由見学
	6日		千葉医科大学
	7日	自由見学	夜 東京発京都へ
	8日	朝京都着名所遺跡見学後	大阪一泊
	9日		大阪発至神戸乗船

【表1】は、上記の【図2】に含まれている浙江省立医薬専門学校視察団の参観日程を書き起こしたものであるが、この視察団の日程が日本の外務省の対支文化事業の支援によって行われたことは、視察旅行後の5月16日に杭州領事代理の米内山庸夫の次のような報告をみても明らかである。

「浙江省立医薬専門学校教授学生日本視察旅行団に関しては種々御配慮に預かりたるところ該旅行団は本月十二日に無事帰校趣にて同校主任教授黄振亞氏昨十三日特に本官を来訪し本邦視察旅行中我方の厚意に対する謝辞を述べ右閣下並びに坪上文化事業部長外関係各位に転達方依頼ありた

「郭琦元 一八九一～一九六四年。一九一八年千葉医専入学。二二年卒業。帰国後、上海亜東医科大学教授となる。一九二六年 五月には千葉医専同窓をはじめとする留日仲間と諮って、上海東南医学院を創設し、校長となった。一九三〇年、私立東南医学院と改称し、附属東南医院も設立した（同院長も併任）。この間に、東南高級薬科職業学校も創立している。郭は、教員間の団結を進め、創業の苦しい時期にも医術に専心し、東南医学院と附属医院を上海で最も名声高いものとした。」⁽⁷⁾

この上海東南医学院に多くの留日学生が関わったことは、中国側の記述にも登場している。例えば、中国のネット検索の baidu 百科によれば、上海東南医学院は、私立東南医科大学、私立亜東医科大学、私立南洋医科大学の3校が合併したもので、1925年に私立東南医科大学の学校経営が中断した時に、同校の教員を努めた郭琦元が私立亜東医科大学の施設を引き継ぎ、私立東南医科大学を設立し、同時に日本の医学部に留学した褚民誼を中心とした学校の理事会が構成され、1926年9月には郭琦元を初代院長とする上海東南学院が設立した、と記述している⁽⁸⁾。

以上、1920年代に入って上海、杭州、蘇州などの各地には医学と薬学を教える近代的な教育機関が相次いで設立し、医学関係の書籍の需要は増大し、さらに医療機器や人体標本及び模型などの病理学関係の諸資料に関する需要が増えてきたことを述べてきたが、内山完造は、まさにこの需要に答え、医学書を供給したことについて「大成功をおさめたことも私の痛快事の一つである」と書き記していたのである。

2. 内山書店と同仁会の漢訳医書

ここでは、内山の「同仁会の漢訳医書の販売に尽力して大成功をおさめたことも私の痛快事の一つである」という記述について見てみたい。

同仁会の活動全般について検討した先行研究としては丁蕾「近代日本の対中医療・文化活動—同仁会研究」があり、また、同仁会が発行した雑誌『同仁』については大里浩秋「同仁会と『同仁』」の紹介があるので、同仁会の活動の詳細はこれらに譲ることにし、ここでは同仁会の活動の一つであった漢訳医書について述べることにする⁽⁹⁾。

1906年6月に創刊号を出した『同仁』は、支那の啓蒙、東西文明の調和、世界の平和などあらゆる方面の評論を合わせ掲載する他、中国、朝鮮、台湾に派遣した医師からの通信なども収録する同仁会の会報的な性格を持つもので、同仁会の事業精神を広く鼓吹する宣伝雑誌でもあったが、1920年代になると同仁会活動を中国語によって宣伝するという必要性がますます高まった⁽¹⁰⁾。

例えば、中国各地における医院の経営と救護活動の宣伝、そして、留日医薬学生の名簿作成、中日医薬学生談話会・中華民国医師講習会の実施など日本と中国との間の医薬界の諸活動を宣伝するために中国語による雑誌の創刊が必要になったのである。そこで、1928年6月に創刊されたのが中国語による『同仁会医学雑誌』であった。

そして、ほぼ時期を同じくして展開されたのが中国語による医薬学関連書籍の出版という事業であった。以下、『同仁会四十年史』がまとめている「華文医薬学書刊行」の項目を引用しておく。

「支那における医薬学の普及を計るは、本会の寄付行為に定められた目的の一つであるが、本会は之が実現の一方法として昭和二年五月華文医薬学書刊行会を起し、我が国に於ける著名の医薬学書を支那文に翻訳して出版し、支那へ日本の医薬学を紹介するに努めた。まず、第一着手として同年西成甫博士の小解剖の翻訳に着手し、昭和五年に之が刊行をみたのを始めとして年と共に多数

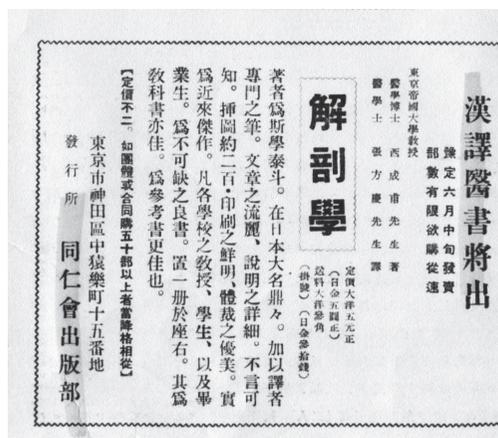
の刊行を続行し、昭和十七六月末における刊行書は左記三十一種の多きに達し、その内には既に三版を重ねたものもある」⁽¹¹⁾

ここで紹介されている西成甫博士の解剖学の中国語版の刊行については、『同仁会医学雑誌』第2巻第5号に掲載された【図5】の広告がその詳細を伝えている。その広告によれば、

「同書の著者の西成甫博士は、斯学の泰頭で、日本でもその名を馳せている。これに加えて翻訳に当たったのは同分野の専門家で翻訳の文章と説明の詳細などは、言わずもそのレベルの高さがわかる。挿絵が約200枚使われており、印刷も鮮明で、書籍の装丁も優美であり、近年の力作である。凡そ各学校の教授、学生、そして、卒業生にも不可欠の良書である。この一冊を座右におけば、教科書として、また、参考書として優れていること言うまでもない」⁽¹²⁾

という触れ込みで、中国語版の医学書の発行が大々的に宣伝された事がわかる。

【図5】西成甫博士の『解剖学』の中国語版の広告



(出典：『同仁会医学雑誌』第2巻第5号，1929年5月の広告より)

また、ここでいう「装丁も優美」という宣伝は、『同仁会医学雑誌』第3巻3号に掲載された広告「同仁会発行書目」でも確認できるが、ここで重要な点は、同仁会発行書目の「中国経售処」(中国販売所)として内山書店が指定されていることである(【図6】と囲みの部分を参照)。

【図6】 同仁会発行書目の広告



(出典：『同仁会医学雑誌』第3巻第3号，1930年3月の広告より)

『同仁会四十年史』は、同仁会が発行した中国語による医薬関連の専門書籍と衛生に関連する一般普及書の刊行が中国においても歓迎されたことについて、以下のように記述している。

「昭和十二年支那事変直後は本事業も一次中止の状態では形勢を觀望していたが、昭和十四年より支那医学界も暫く欧米依存を一蹴した為か本訳書の売れ行きが頓に増加したので、其以来再版三版をしたものが多い。これが書目及び隔年売上高は左の通りである。尚ほ特筆すべきは之等の書籍の翻訳は多く本会評議員故湯爾爾和博士が其門弟等を督励して其の衝に当られた一事で、博士を煩はすに至って本会の訳書の声価頓に揚がったと言うも過言ではない。

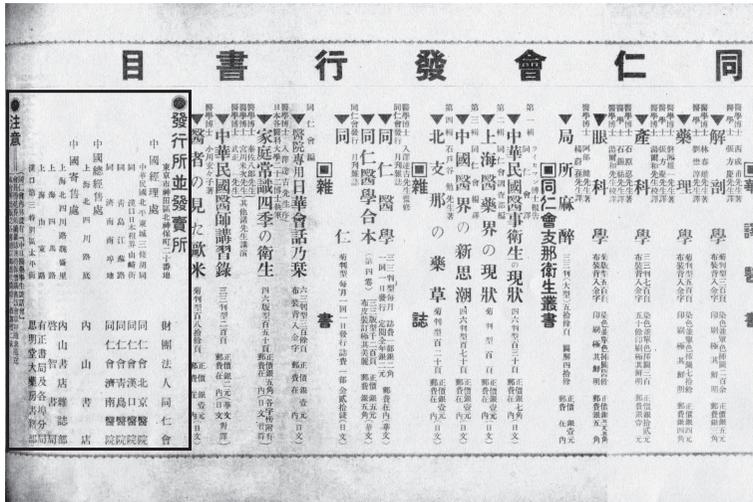
各年度売上高

昭和五年	一〇二一円七七
昭和六年	一六一五円七二
昭和七年	五〇一五円七二
昭和八年	七七八〇円〇八
昭和九年	一一六五九円五三
昭和十年	一六〇一八円七七
昭和十一年	一九一三三円〇四
昭和十二年	二三八三二円三二
昭和十三年	一一二〇一円七二
昭和十四年	一六六一〇円六一
昭和十五年	二六五五四円三六
昭和十六年	三二五六三円八九
昭和十七年（上半期）	二三四七六円〇四」 ⁽¹³⁾

ここで重要なことは同仁会発行による中国語の各種医学関連書籍の各年度の売上高は、中国での販売所、特に、上海の取次を担っていた内山書店の売上高にも影響したであろう、ということであろう。内山

が「同仁会の漢訳医書の販売に尽力して大成功をおさめたことも私の痛快事の一つである。」と表現したのは、これら中国語による医学書販売の売上高の増加を書き留めたものであると思われる。

【図7】 同仁会発行書目の広告



(出典：『同仁会医学雑誌』第4巻第6号，1931年6月の広告より)

【図7】 同仁会発行書目の広告を表に起こしたものが【表2】 同仁会発行書目であるが，同仁会が中国語による医薬書を翻訳出版してから僅か2年を経過した時点で，医学専門書の他，一般向けの衛生叢書，雑誌，その他病院で中国人を診察するために使う中国語会話書籍など合計16冊を刊行していたことを確認できる。

【表2】 同仁会発行書目

同仁会既刊書籍			
華訳医書	解剖学	医学博士西成甫著	医学士張方慶訳
	薬理学	医学博士林春雄著	医学士劉懋淳訳
	産科学	医学博士磐瀬雄一著 医学博士湯爾和校訳	医学士張方慶訳
	眼科学	医学博士石原忍著 医学博士湯爾和校訳	医学士石錫祐訳
	局所麻醉	医学博士阿部健著	楊蔚蓀訳
同仁会支那衛生叢書	中華民國醫師衛生の現状	ライヒマン博士報告 同仁会訳	同仁会訳
	上海医薬界の現状	同仁会調査部編	
	中国医界の新思潮	同仁会編訳	
	北支那の薬草	石戸谷勉著	

雑誌	同仁医学	医学博士入澤逢吉先生監修	
	同仁医学合本	同仁会発行月刊雑誌	
	同仁	同仁会発行月刊雑誌	
雑書	医院専用日華会話乃栞	同仁会編	
	家庭常識四季の衛生	日本各医科大学二十二博士	
	中華民国医師講習録	医学博士泰佐八郎	
		医学博士宮川米次	
医者のみた欧米	医学博士小川玄々子著		

そして【図7】同仁会発行書目の広告の末尾には、内山書店が同仁会の中国語医学書を独占して販売したことを伺えさせる記事も掲載されていた（【表3】同仁会発行書目の発行所と発売所を参照）。

【表3】 同仁会発行書目の発行所と発売所

発行所並発売所	東京市神田区北神保町二十番地	財団法人同仁会
中国経理処	中華民国北平東城三条胡同	同仁会北京医院
	中華民国漢口日本租界山崎街	同仁会漢口医院
	中華民国青島江蘇路	同仁会青島医院
	中華民国済南商埠路	同仁会済南医院
中国総経售処	上海北四川路底	内山書店
中国寄售処	上海北四川路魏盛里	内山書店雑誌部
	上海四馬路	啓智書局
	上海山東路	有正書局及各埠分局
	漢口第三特別区太平街	思明堂大薬房書籍部

これらの広告に掲載された情報から同仁会が発行した中国語の専門書籍と一般向けの衛生関連の書籍の販売と取次は、北京、漢口、青島、済南の同仁会医院の他では、内山書店が中国全体における総販売を担当し、上海では内山書店雑誌部、啓智書局、有正書局の三つの書店が独占的な販売権をもっていたことを確認することができる。

上海の内山書店が同仁会が発行した各種の書籍に対して独占的に取り扱っていたことは雑誌『同仁医学』の他、日本と中国人留学生の活動を支援する活動を展開した日華学会の雑誌『日華学報』に掲載された広告からも確認することができる（【図8】と囲みの部分を参照）。

【表4】『同仁医学』発行部数1700部の配布先

有料の部 (一部式角)	定期講読直接扱	565部
	有料会員	92部
	談話会員	108部
	上海内山書店	130部
	広東河村書店	22部
	小計	917部
無料の部	寄贈	200部
	各病院	180部
	合本用	100部
	本部職員用	15部
	広告勧誘用	35部
	内務省及逓信省	4部
	随時宣伝用	230部
	その他	19部
	小計	783部
合計	1700部	

【表5】『同仁』発行部数2000部の配布先

有料の部 (一部金二十銭)	東京堂	35部
	上海内山書店	5部
	談話会員	62部
	有料会員	154部
	定期購読	8部
	小計	917部
無料の部	寄贈	680部
	各病院	530部
	団体寄贈	292部
	保存用	20部
	広告勧誘用	20部
	文化事業部	10部
	納本	2部
	随時用その他	182部
	小計	783部
合計	1500部	

ここにみえる【図9】を書き起こしたのが、【表4】と【表5】である。残念ながら1937年の外務省記録の他に『同仁医学』と『同仁』の発行部数に関する記録を現在では見つけることができないが、少なくとも1937年に至るまで同仁会が発行する中国語の書籍と雑誌の販売において上海の内山書店が優位な地位を占めていたことは間違いないであろう。

(続く)

注

- (1) 高綱博文『「国際都市」上海の中の日本人』、研文出版、2009年。その他に呂慧君「日中友好の〈媒介者〉内山完造の文学・文化活動に関する多元的研究」(関西学院大学博士論文、2013年)は、内山書店の経営については触れていないが、『上海日日新聞』、『大陸新報』、『改造日報』を取り上げた実証研究として有益である。
- (2) 見城悌治『留学生は近代日本で何を学んだのか—医薬・園芸・デザイン・師範』、日本経済評論社、2018年。
- (3) 外交省外交史料館蔵の「浙江省立医薬専門学校教職員に関し報告」、Ref. B05016169000. H-0915)、1935年3月。
- (4) 外務省外交資料館蔵、アジア歴史資料センター、Ref. B05015743700、(満支人本邦視察旅行関係雑件／補助実施関係 第四巻、H-6-1-0-4_2_004)、1929年4月。
- (5) 外務省外交史料館蔵、アジア歴史資料センター、「浙江省立医薬専門学校へ医学標本模型寄贈に関する件」、Ref. B05016031400、(寄贈品関係雑件 第七巻、H-6-2-0-26_007)、1929年5月、所収。
- (6) 外務省外交史料館蔵、アジア歴史資料センター、「支那出張報告書」、Ref. B05016031400、(寄贈品関係雑件 第七巻、H-6-2-0-26_007)、所収。
- (7) 見城悌治『留学生は近代日本で何を学んだのか—医薬・園芸・デザイン・師範』、前掲、99頁。
- (8) <https://baike.baidu.com/item/> を参照。
- (9) 丁蕾「近代日本の対中医療・文化活動—同仁会研究」①～④、(『日本医史学雑誌』1999年～2000年)、大里浩秋「同仁会と『同仁』」(神奈川大学、『人文学研究所報』、第39号)を参照。
- (10) 穂坂唯一郎編『同仁会四十年史』、同仁会、1943年、195頁。
- (11) 「華文医薬学書刊行」、『同仁会四十年史』、前掲、197頁。
- (12) 「解剖学」、『同仁会医学雑誌』第2巻第5号、1929年5月の広告。
- (13) 「華文医薬学書刊行」、『同仁会四十年史』、前掲、198頁。